印内の重右衛門話

船橋を代表する民話の一つに、重右衛門話があります。この民話の主人公「重右衛門」は船橋の印内を出生の地とし、船橋市近郊で多くの話が語り継がれてきました。その一部が『房総の民話』の中に紹介され、広く注目されるようになりました。

地元周辺では、重右衛門の名は、変わり者の代名詞のように使われていましたが、この民話を「じゅえむばなし」と呼び、親しまれています。

この民話の一つを紹介します。

～重右衛門の証文～

（『船橋市史　民俗・文化財編』より）

むかし、印内村に、変人奇人で、そのうえ大層つむじ曲がりの重右衛門という百姓がいました。

重右衛門は大男で、大変力持ちでしたが、怠け者で、さらに大酒飲みでしたので、先祖伝来の資産をすっかり傾けいつも貧乏でした。そのため、近隣の村々の旦那衆の所に転々と雇ってもらって暮らしていました。

ある時、重右衛門は印内村から少し離れた藤原新田の地主の家に奉公していました。ここである日の朝、その家の旦那が

「重右衛門、今日は少し雨風の天気じゃが、たいしたこともないで、田耕いをやってくれ」

と言いながら田耕いを命じました。

この旦那の言い付けに、重右衛門はわざわざ戸口まで行って、外の天気の具合を眺めていました。寒い雨風模様でした。戻って来た重右衛門は

「旦那、今日は休みだべ。証文をよく読んで下せえ。休みだ。休み」

と言いながら、囲炉裏の傍らにどっかりと胡坐をかき、もう梃子でも動かないという格好をしていました。

この様子に豆鉄砲をくった形の旦那は、内心怒りながらそーっと証文を出して見ました。表側を丁寧に眺め、それから念のために裏側を見ました。すると小さな文字で「北風はいやで候ふ。雨の日は申すに及ばず」と、問題の文章がさらさらっと書かれていました。

これには旦那もたまげてしまい、

「これにはやられたわい。重右衛門という男は、聞きしに勝る知恵者の奇人だわい。わしの家では、とてもとても使いこなせないわい」

と言って、重右衛門を即刻お払い箱にしたということです。

船橋市教育委員会